三国志

九

吉川英治

悠久の大自然と治乱興亡果てない大陸の歴史が育くんだ複雑な中国の人と心。魏蜀呉三国の覇権と政治の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方。

六興出版

吉川英治

三国志

第九巻　出師の巻

三国志　第9巻（全10巻）

平成2年3月20日　初版印刷
平成2年3月25日　初版発行

著　者　吉川英治
発行者　賀來壽一
発行所　株式会社六興出版
〒112 東京都文京区水道2－9－2
電話　03（943）3431（代表）
振替　東京1-92448

印刷・製本　中央精版印刷株式会社
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。
ISBN 4-8453-0219-5 C0093

目

次

骨を削る……3
建業会議……7
呂蒙と陸遜……12
笠……16
荊州変貌……19
鬢糸の雪……26
月落つ麦城……31
蜀山遠し……38
草喰わぬ馬……46
国葬……51

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

成都鳴動……55
梨の木……60
曹操死す……65
武祖……70
七歩の詩……77
私情を斬る……82
改元……89
蜀また傚う……98
桃園終春……105
雁のみだれ……110

呉の外交……117
此一戦……126
冬将軍……131
慰霊大望……136
一書生……140
白帝城……147
石兵八陣……159
孔明を呼ぶ……164
遺孤を託す……169
魚紋……173

蜀呉修交……183
建艦総力……190
淮河の水上戦……194
南蛮行……199
南方指掌図……208
孟獲……215
輸血路……220
心縛……225
孔明・三擒三放の事……229
王風羽扇……236

毒泉……243
蛮娘の踊り……248
女傑……255
歩く木獣……262
藤甲蛮……267
戦車と地雷……272
王風万里……276
鹿と魏太子……281
出師の表……285

出師の巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

骨を削る

一

まだ敵味方とも気づかないらしいが、樊城の完全占領も時の問題とされている一歩手前で、関羽軍の内部には、微妙な変化が起こっていたのである。

魏の本国から急援として派した七軍を粉砕し、一方、樊城城下に迫ってその余命を全く制しながら、あとのもう一押しという間際へ来て、何となく、それ迄の関羽軍らしい破竹の如き勢いも出足が鈍ったような観がある。

この理由を知っているのは、関平その他、ごく少数の幕僚だけだった。

今も、その関平や王甫などの諸将が、額をあつめて、

「……何にしても、全軍の死命に関わること。なおざりには致しておけぬ」

「一時の無念は忍んでも、ひとたび軍を荊州へ回し、万全を期して、出直すことがよいと考えられるが」

「……どうも困った事ではある」

沈痛に囁き交わしていた。

ところへ一名の参謀があわただしく営の奥房から走ってきて、

「羽大将軍のお下知である。——明日暁天より総攻撃を開始して、是が非でも、あすのうちに、樊城を占領せん。自身出馬する。各々にも陣々へ旨を伝え、怠りある勿れ——との仰せです」

と、伝えて来た。

「えっ、総攻撃を始めて、戦場へ立たれると？」

人々は愕然と顔見合わせ、それは一大事であるといわぬばかりに、一同して営中の奥まった一房へ出向き、

「今日は御気分いかがですか」

と、恐る恐る帳中を伺った。

関羽は席に坐していた。骨たかく顔いろも勝れず、眼のくぼに青ぐろい疲れが窺われるが、音声は常と少しも変わることなく、

「おう、大したことはない。打ち揃って、何事か」

「ただ今、お下知は承りましたが、皆の者は、さなきだに、御病体を案じていたところとて、意外に打たれ、もう暫し御養生の上になされてはと、お諫めに出た次第ですが」

「ははは。わしの矢瘡を案じてか。――案ずる勿れ。これしきの瘡に何で、関羽が屈するものか。また何で天下の事を廃されようぞ。あすは陣頭に馬をすすめ、樊城を一揉みに踏み潰さずには措かん」

王甫は膝を進めて、

「お元気を拝して、一同、意を強ういたしますが、いかなる英傑でも、病には勝てません。先頃から御容態を拝察するに、朝暮のお食慾もなく、日々お顔のいろも冴えず、わけて御睡眠中のお唸きを聞くと、よほどな御苦痛にあらずやと恐察いたしております。なにとぞ、蜀にとって唯一無二なるお身でもあり、旁々、将来の大計の為、ここはひとたび荊州へお引揚げあって、充分なる御加養をして戴きたいと存ずるのであります。……いま大将軍の御身に万一のことでもあっては、ただに荊州一軍ばかりでなく、蜀全体の重大なる損失ともなることですから」

「……」

黙然と聞いていた関羽は、やおら座をあらためて、王甫のことばを抑えた。

「王甫王甫。又関平もその他の者も、無用な時を費やし又無用な心をつかわなくてもよい。わが生命はすでに蜀へささげてあるものだ。武人の一命は常に天これを知るのみ。樊城一つを攻めあぐねて、荊州へ引揚げたりと聞いては以後、関羽の武名はともあれ、蜀の国威にかかわる。――一矢の瘡など何かあらん。戦場に立てば十矢百矢も浴びるではないか。黙って、わしの下知に伏せ」

人々は、一言もなく、そこを退がったが、憂いは

なお深い。その夜、関羽はまた、大熱を発し、終夜、痛み苦しんだ。龐徳に射られた左の臂の瘡である。あの鏃に、死んだ龐徳の一念がこもっているかのようだった。

総攻撃も、為に自然沙汰止みになった。

王甫や関平は、諸方へ人を派して、

「名医はないか」と、遍く求めさせた。

するとここに風来の一旅医士が童子一名をつれ、小舟にのって、呉の国の方から漂い着いた。沛国譙群の人、華陀という医者だった。

二

江岸監視隊の一将が、華陀を連れて、関平の所へ来た。

「この旅医者は、呉の国から来たと申しますが、先頃より諸州へ医師をお求めになっておる折から、或はお役に立つかも知れぬと存じて連れ参りましたが」

関平はよろこんで、ともあれ自分の幕舎へ迎え、まず鄭重にたずねた。

「先生の尊命は？」

「華陀、字は元化」

「さては、呉の大将周泰の傷を治したと聞く名医でおわすか」

「かねがね景仰する天下の義士が、いま毒矢にあたってお悩みある由を承り、遠く舟を繰って駈けつけたわけでござる」

「父は蜀の大将軍たり。先生は呉国の医たるに、抑何の故あって、遙々渡られたか」

「医に国境なし。ただ仁に仕えるのみです」

「おお、では早速、父の毒傷を診て下さい」

華陀を伴って、彼は父の帳中へ行った。折しも関羽は馬良をあいてに碁を囲んでいた。大熱のため口中は渇いて蘇を含むがごとく、傷口は激痛して時々五体を慄わすほどだったが、豪毅な精神力はそれを抑えて、人には何気なく見えるほど平然と囲碁に紛らわしているのだった。

「父上。呉の名医華陀がはるばる見えました。ひとつ瘡の治療を請われてはいかがですか」
「む。む。……待て待て。馬良、こんどはわしの番か」
衣服を袒ぎながら、関羽は瘡を病んでいる片臂を医師の手にまかせ、なお、右手では碁盤に石を打っていた。
「どうじゃ馬良。名手であろうが」
「何の……その一石は、やがて馬良の好餌でしかありませんぞ」
二人とも碁に熱中していて、華陀の顔すら振り向かない。――が華陀は、関羽のうしろへ寄って、肌着の袖口をめくりあげ、凝と臂の傷口を診ていた。
侍側の諸臣はみな眼をみはった。瘡口はさながら熟れた花梨の実ぐらいに膨れあがっている。華陀は嘆息をもらした。
「これは烏頭という毒薬が鏃に塗ってあった為で、その猛毒はすでに骨髄にまで通っています。もう少し放っておかれたら片臂は廃物となさるしかなかったでしょう」
関羽は初めて華陀の顔を振り向きながら、
「今のうちなら治る法があるか」とたずねた。
華陀は自信をもって、
「ある事はありますが、ただ将軍が愕き給わんことを畏れます」
「ははは。死をだに顧みぬ大丈夫が、医師の手に弄られるぐらいな事で愕きはせぬ。よいように療治してくれ」と、片臂を委せたまま、ふたたび盤上の対局に余念なかった。
華陀は、薬嚢を寄せて、中から二つの鉄の環を取り出した。一つの環を柱に打ち、一つの環に関羽の腕を入れて、縄をもって縛りつける準備をした。関羽は、異な事をするものかなと言わぬばかりに、わが腕を見て、
「華陀とやら、どうするのか」
と、訊いた。華陀は答えて、

「医刀をもって肉を裂き、臂の骨を取り出して、烏頭の毒で腐蝕したところや変色した骨の部分をきれいに削り取るのです。おそらくこの手術で気を失わぬ病人はありません。いかに将軍でも必ず暴れ苦しむに違いありませんから、動かぬように、暫く御辛抱をねがうわけで」

「何かと思えば、そんな用意か。大事ない、存分に療治してくれい」

鉄環を除って、そのまま、手術を請うた。

華陀は瘡を切開しにかかった。下に置いた銀盆に血は満ち溢れ、華陀の両手もその刀もすべて血漿にまみれた。その上、臂の骨を鋭利な刃ものでガリガリ削るのであった。関羽は依然として碁盤から眼を離さなかったが、周りにいた関平や侍臣はみな真っ蒼になってしまい、中には座に耐えず面をそむけて立って行った者すらある。

漸く終わると、酒をもって洗い、糸をもって瘡口を縫う。華陀の額にもあぶら汗が浮いていた。

建業会議

一

手術を了えて退がると、華陀はあらためて、次の日、関羽の容体を見舞いに来た。

「将軍。昨夜は如何でした」

「いや、ゆうべは熟睡した。今朝さめてみれば、痛みも忘れておる。御身は実に天下の名医だ」

「いや、てまえも随分今日まで、多くの患者に接しましたが、まだ将軍のような病人には出会ったことがありません。あなたは実に天下の名患者でいらっしゃる」

「ははは。名医と名患者か。それでは病根も陥落せずにおられまい。予後の養生はいかにしていたらよいか」

「怒らないことですな。怒気を発するのは禁物で

す」

「かたじけない。よく守ろう」

関羽は百金を包んで華陀に贈った。華陀は手にも取らない。

「大医は国を医し、仁医は人を医す。てまえには国を医するほどな神異もないので、せめて義人のお体でも癒してあげたいと、遙々これへ来たものです。金儲けに来たわけではありません」

飄然とまた小舟に乗って、江上へ去ってしまった。

その頃、魏王宮を中心とし、許都、鄴都の府は、異様な恐慌に戦いていた。

早馬、また早馬。それがみな樊川地方の敗戦を伝え、七軍の全滅、龐徳の戦死、于禁の投降などが、ひろく国中へ漏れた為、庶民まで上を下へと騒動して、はやくも関羽軍が攻め入るものと怯え、逃散する百姓さえあった。

魏王宮ではきょうもその事について大会議が開かれていた。この会議でも、関羽の名を恐れ怯えた人々は、早くも魏王宮の遷都説まで叫んだが、司馬懿仲達が立って、その不可を論じ、

「要するに、こんどの大敗は、魏軍が弱かったのではなく、洪水の力が関羽に味方した為と言ってよい。関羽の勢いがあまりに伸びるのを欲しないのは呉の孫権である。いま呉を説いて、関羽のうしろを突けといえば、孫権はかならず呼応するにちがいない」と、獅子吼した。

司馬仲達と共に、丞相府の主簿をしている蔣済も哭いて言った。

「自分と于禁とは、三十年来の友であったが、何ぞはからんこの期において、龐徳にすら劣ろうとは。いま仲達の申された策は金玉の言と思う。一刻も早く呉へ急使を派し、この大屈辱をわれ等も一致して拭わねばならん」

曹操は考えていたが、ただ弁舌の士のみ遣っても、或は呉が動かないかもしれない。あくまで、難には魏が当たる事実を示しておいて、然る後に、呉を説

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.